

地域認識としての景観特性に関する研究

—東京都区内景観百選を対象にして—

3605F042-5 宮下 真紀子*

Makiko Miyashita

昭和50年代後半ごろより多くの自治体で景観百選事業が行われてきた。本研究ではこれまでに東京都区内で百景として選定された1114の景を詳細に分類し、選ばれやすい場所や風景を明らかにした。また、地域の骨格構造が地域の理解に重要な役割を果たしているという考えに立ち、選定事例から認識できる地勢と都市構造の特色をまとめた。さらに、こういった地域認識を得ることができる景観の特色について考察した。

Key Words : 地域認識、景観体験、景観百選

1. 研究の背景と目的

景観法の制定、施行を経て「景観まちづくり」の考え方は急速に日本中に広がっている。

なぜ景観を整備しなければいけないのか、という根本的な問いには、これまでに多くの研究者による示唆がある。例えば、中井は風景計画の意義として①価値ある風景の保全、②地域経済の活性化、③地域共通の価値観づくり、④地域の生活環境保全、⑤まちづくり意識の啓発を挙げた¹⁾。また、佐々木は現代の景観の目的として、improvement、identity、sustainability、economyを挙げ、美しさの創出の次に考えるべきことを示している²⁾。

「共通の価値観」、「identity」などの言葉に表れているように、地域らしさを創出しようという活動は古くからあり、歴史的資源の保全や地域拠点づくり、デザインキーワードによる街並み形成、特徴的な眺望の保全など様々な手法で行われてきた。中村良夫や樋口忠彦をはじめとする景観研究者によって語られてきたこれまでの景観論は、その拠り所として大きな役割を果たしてきたが、複雑化、肥大化した大都市の都心部などでは、適応の限界も感じられる。

ある場所から得られる情報や抱くイメージはさまざまであり、その総体として地域らしさはある。したがって景観を読み解く観点としてもさまざまな方向からアプローチする必要があるだろう。地方自治体などが行ってきた「～風景100選」の類の取り組みは、さまざまな「地域らしい風景」の抽出はしているものの、「なぜその地域らしいのか」という点に深い言及はされない傾向にある。

本研究では、景観百選事業の分析を通じて、都心部において地域らしいといわれる風景の特徴を明らかにすることを目的とする。またこの作業を通じて、今後の景観計画における論点を示すことを目指す。

2. 研究の概要

2-1 資料収集、現地調査

地域らしさを抽出した事例として、自治体による景観百

選事業に着目した。23区でこれまでに行われている景観百選、またはそれに類する事業を表2-1に示す。ここで都市景観賞、まちなみコンクールなど、地域づくりを表彰する目的で行われた選定事業は含まないこととした。

このうち選定が終了している14事業、1114件を対象とし選定に関する資料を収集する。また、資料が十分に揃う事業のうちで広い川や崖線があるなどの共通点があり、事業実施時期に13年の差がある世田谷区と北区については現地調査を行う。

2-2 大分類、小分類

まず、選定されやすい都市要素を特定する。1114件を写真、絵、解説文などを参考に、大きく8項目に分類した。さらに、それぞれ都市の要素ごとに細かい分類を行った。

2-3 地域認識の抽出

地域の骨格構造が地域の理解に重要な役割を果たしているという考えに立ち、それぞれの事例で認識されている地勢や都市構造を抽出する。また、選定された場所がどのような構図で描かれているかをまとめる。対象は、詳しい解説文があり、シーンの構図を限定している写真集やポストカードが発行された事業とし、足立区、大田区、品川区、杉並区、練馬区をとりあげた。

2-4 現地調査に見る選定事例の景観体験

北区と世田谷区における200箇所の現地調査について、認識される地域の構造と景観体験の特徴を記述した。特に、複数の地域構造の認識がされた事例を取り上げ、それらの景観体験の特色を考察した。

3. 景観百選事業の傾向

3-1 大分類

景観百選事業で選定された1114件を写真、絵、解説文などを参考に、眺めを選定した『眺望』、連続的に存在する場所として『水辺／並木／遊歩道／鉄道』、多様な場の景観を経験すると考えられる『街並み／坂』、明確な境界性をもち閉ざされた領域を形成する『公園／池／緑地』、境界性とともにも歴史的意味も強く持つ『寺社』、ランドマークとなり人

表 2-1 23 区で行われた百景事業

区	事業名	年度	選定方法	資料の種類	事業経緯
1	足立区 足立六十景	H4	候補募集→投票	写真・絵・解説文	区政 60 周年記念事業
2	板橋区 板橋十景	H15		写真・解説文	区制施行 70 周年記念事業
3	大田区 大田区百景	S59	委員らによる	絵・解説文	S39 現在の風景を記録
4	大田区 新大田区百景	H9	委員+住民アンケート	写真・絵・解説文	区政 50 周年記念事業・大田区百景の更新
5	北区 北区景観百選	H8.9	候補募集→投票	写真・解説文	区政 50 周年記念事業
6	品川区 しながわ百景	S62	候補募集→投票	写真・絵・解説文	特別区政 40 周年、区民憲章制定 5 周年記念事業
7	渋谷区 渋谷景観百選(仮称)検討中	H18	未定		景観計画検討の一環として
8	杉並区 杉並百景	H4	候補募集→投票	写真・写真集・解説文	区政施行 60 周年・「まち」デザイン賞、知る区ロードの成功を受けて杉並区基本構想(H1)、杉並区まちづくり基本方針(H2)の柱として景観まちづくりが位置づけられたことを受けて
9	世田谷区 せたがや百景	S59	候補募集→投票	写真・絵・解説文	地区まちづくりの原点として
10	台東区 思い出の景観 30 選	H15	区による候補選定→投票	写真	景観に対する親しみの向上
11	中央区 中央区八景	S57	投票(詳細不明)	写真・解説文	観光事業
12	千代田区 千代田景観百選	H6	アンケート→委員選定	写真	千代田区都市景観形成方針(H5)にもとづく基礎資料とする
13	中野区 中野まちづくり百選	S62	候補募集→委員選定	リスト・一部写真	まちづくり推進計画(S61)を受けて
14	練馬区 練馬区の素敵な風景 100 選	H18	候補募集→委員選定	写真	独立 60 周年記念事業・観光事業
15	練馬区 ねりま百景	S62	候補募集→投票	写真・写真集・解説文	独立 40 周年記念事業
16	目黒区 目黒百景	S46	区、郷土研究会による	写真・解説文	現状の記録、区内の文化財の一資料

表 3-1 大分類

区	眺め	場所・もの								計
		遊水歩道・並木道・	街並み・坂	地公園・池・緑	神社	施設・建築物	橋・樹木・文化財など	行事・祭	水辺・並木・遊歩道・鉄道	
足立区	4	13	6	21	15	10	13	10	92	
板橋区	0	2	1	1	4	0	4	2	14	
旧大田区	18	36	19	8	22	25	29	0	157	
大田区	19	34	21	22	20	24	24	5	169	
北区	5	30	16	20	19	21	16	8	135	
品川区	11	23	19	18	34	22	31	13	171	
杉並区	4	23	16	30	23	25	20	9	150	
世田谷区	9	24	27	27	29	16	14	12	158	
台東区	0	4	7	5	6	7	5	8	42	
中央区	1	0	5	1	1	1	1	2	12	
千代田区	17	29	23	19	9	29	23	0	149	
中野区	4	14	15	13	24	15	40	12	137	
練馬区	1	16	8	30	31	17	20	7	130	
目黒区	2	5	23	10	24	45	13	0	122	
合計	95	253	206	225	261	257	253	88	1638	

表 3-2 小分類

眺め	水辺・並木・遊歩道・鉄道	街並み・坂	公園・池・緑地	施設・建築物	橋・樹木・文化財など
川から・川越し	28 中小河川沿い	41 商店街	28 中・小公園	61 公共施設	99 橋
陸橋から・線路	14 大きな並木	34 駅・役所周辺	27 大公園	59 古い建築物	46 樹木
湾岸	13 小さな並木	30 街道筋	17 緑地・雑木林	50 駅	33 その他
街中から	10 大河川沿い	32 その他	15 庭園	20 学校	31 門
外部要素を	9 川沿いの並木	21 小坂	15 池	18 その他	25 地蔵・石仏・観音像
高台から	9 濠	17 産業	14 植物園・生産緑地	10 土木施設	16 塚
建物から	4 湾岸	15 住宅街面	10 島	4 産業施設	7 その他の文化財
緑地	5 線路・鉄道	15 市場	9 その他	3 総計	257 墓
その他	3 親水公園	12 田畑	8 総計	225 行事・祭	堀・壁
総計	95	253	261	253	88

が集まる場所として『施設・建築物』、点的、物的な選定である『橋・樹木・文化財など』、『行事』の 8 項目に分類した。

「寺と界わい」といったように二つの項目にまたがっているものは両方でカウントし、集計を行った(表 3-1)。

選定の方法の違いが影響したばらつきはあるが、合計を見ると場所・ものの選定はほとんど同じ割合であることがわかる。

3-2 小分類

3-1 での分類を項目ごとにさらに小さく分類した。大分類での項目別割合がほぼ均等であったのに対し、小分類では選定しやすいものとそうでないものが明確になった。たとえば点的要素では橋や樹木の選定が多く、また個別の建物では人が集まる公共施設が多く選定されていることが

わかる。小分類の集計結果を表 3-2 に示す。

二つ以上の項目にまたがって選定された事例は 430 あった。そのうち、特に多かった組み合わせを表 3-3 に示す。中小河川沿いで 12/41、大河川沿いで 8/32 の事例で橋との組み合わせで選定されていることがわかる。また、寺社では樹木や門など、地域のランドマークになる物的要素との組み合わせで選定されることが多い。

表 3-3 組み合わせの選定(小分類)

神社/寺社の祭り	25	寺/墓	6
駅・役所周辺/駅	16	街道筋/神社	5
中小河川沿い/橋	12	大公園/公共施設	5
寺/樹木	12	庭園/公共施設	5
寺/門	10	神社/樹木	5
大河川沿い/橋	8	川から・川越し/大河川沿い/橋	7
寺/その他の文化財	8	街中から/濠/緑地・雑木林/門	4
寺/寺社の祭り	7		

3-3 景観百選で選定されやすい風景

景観百選事業では多くの場合、都市の要素を幅広くバランスよく選定しようという意図があるため、大きな分類で見ると、水辺や並木、街並み、寺社や文化財、都市施設などがほぼ均等に選定されている。しかし具体例を細かく分類すると、特に選定されやすい都市要素が明らかになった。

寺社や公共施設、公園など、明確な境界性を持ちつつも自由に出入りでき、地域住民が共有していると感じるような場所は多く選定された。街なかでは、河川沿いや並木道など、都市のうらおいを演出している要素が多く選定され、商店街や街道筋など賑わいを象徴する要素の選定数はこれに次ぐ選定数となった。橋や樹木、門などは、川や通りを印象づける添景として、多く選定されている。

4. 地域認識の抽出

4-1 地域認識とは

本研究では、既存の景観論を踏まえ、理解される地域の情報を地勢・都市構造・細部構造・都市要素の4つに分けて考える。このうち地勢・都市構造の認識については、地域構造上の場所の位置づけに大きく寄与することから地域認識と呼び、その場所自体の理解に寄与する細部構造・都市要素の認識を場所認識と呼ぶこととする。

日本の地勢については樋口が体系的にまとめている³⁾が、都心部を対象にした本研究では主に緑地や坂道によって認識される高低差について扱う。また都市構造についてはケヴィン・リンチにより分類された都市のイメージをつかむ district・edge・landmark・path・node の5つの要素を用いる⁴⁾。細部の空間構造についてはたとえば都市デザイン研究体によるまとめがある⁵⁾。都市要素は、河川の断面形状や、街路のD/Hなど、その場所のディティールの認識のことを言う。

本研究では、地域の骨格構造が地域の理解に重要な役割を果たしているという考えに立ち、地域の構造を読み取っている地勢とリンチの5要素が景観からどのように読みとられているかに着目して分析を行う。

4-2 地域認識の抽出方法

同じ場所で同じ行動をしたとしても、まなざしや知識の量によって認識される地域の構造は人により異なってくる。本研究では発行されたPR冊子などの解説文や写真、絵を根拠に、認識していると推察される要素をピックアップした。たとえば、「高台にあり」という記述からは地勢の認識がされていると考え、「広大な敷地に」とあれば district を認識していると判断する。また写真集などで、ある建築物がそれ単体でなく前の通りと共に描かれている場合はその path も同時に認識し、通りの landmark になっていると考える。

4-3 文献調査から読み取る地域認識

景観百選事業で選定されている、地域らしい風景とされた場所は、地域認識の観点からはどのように位置づけられるのかを調査する。ここでは、解説文の他に写真集や絵画集の情報源がある足立、大田、品川、杉並、練馬の5区を対象とし、地域認識の抽出を行った。

表 4-1 文献調査より読み取られた地域認識の割合 (%)

区(選定数)	地勢	district	edge	path	node	landmark
足立区(60)	1.7	36.7	8.3	28.3	11.7	35.0
大田区(106)	9.4	34.9	30.2	27.4	18.9	46.2
品川区(100)	14.0	25.0	25.0	27.0	17.0	44.0
杉並区(100)	2.0	30.0	14.0	31.0	21.0	56.0
練馬区(100)	3.0	35.0	9.0	23.0	16.0	61.0

総じて district の割合が多いのは、3-2の小分類において大きな公園や寺社が多いことと対応している。また、edge のほとんどは河川が認識される事例を分類したものであり、多摩川や呑川のある大田区や、東京湾のそばで運河の多い品川区で高い割合となった。

また、複数の認識がされる場所は地域骨格構造の理解において重要な場所であると考えられる。地勢と都市構造の認識数の割合を以下に示す。

表 4-2 地域認識の重複率 (%)

認識数	1 以上	2 以上	3 以上	4 以上	5 以上	平均認識数
足立区	81.7	30.0	8.3	1.7	0.0	1.22
大田区	86.8	54.7	19.8	5.7	0.0	1.67
品川区	79.0	51.0	16.0	6.0	0.0	1.51
杉並区	93.0	41.0	15.0	4.0	1.0	1.54
練馬区	83.0	43.0	19.0	2.0	0.0	1.47



図 4-1 大田区百景 61 多摩川と大師橋

川や遊歩道の選定が多い足立区は district、path のみの認識が多く、2つ以上の認識がされる事例は3割と少なくなっている。杉並区は、樹木や動植物、寺社の選定が多く、landmark のみの認識がきわめて多い。

川の選定が多い大田区では、橋や水門との組み合わせによる選定も多く、edge と node または landmark との組み合わせとして2つ以上の地域認識がされる割合が多くなった。



図 4-2 足立六十景 3 花畑記念庭園

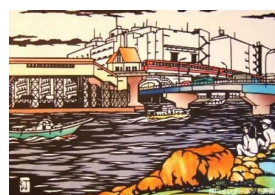


図 4-3 しながわ百景 60 大井競馬場前駅と運河、モノレール

4つ以上の認識がされた事例には、大きな河川、湾岸や高台の選定が目立つ。3-1の大分類における眺望に該当するものが多い。

4-4 地域認識の複層性と景の構図の関係

図4-2と図4-1、4-3の比較から、公園や寺社のように周囲を樹木に囲まれた圍繞景観よりも、河川沿いや高台のように周囲が見渡せる眺望景観のほうが、より複層的な地域認識がされやすいことが推察される。

また、同じ分類に該当する景であっても、内部から眺めるか、外部から眺めるかで地域認識は変化すると考える。



図4-4 杉並百景 24
青梅街道のイチヨウ並木

並木を例に挙げると、並木の内部を眺めている図4-4のような構図では、pathの認識しか判断できないが、交差点の外から眺めた図4-5のような構図では、並木が始まる場所をnodeとして認識していると判断できる。



図4-5 しながわ百景 77
西小山桜並木通り

5. 現地調査に見る選定事例の景観体験

5-1 視点場を限定した選定

全1114事例から、「～からみた○○」という選定名ものをピックアップすると34件であった。また、解説文の中で重要な視点場や構図を限定しているものは28件あった。これは全体の5.6%に過ぎず、選定された場所やものをどのように眺めるかはその場所を訪れた本人に委ねられている。

5-2 景観体験の分類

5-1の考察を受けて、景観体験とは4章で触れた写真や絵画のような視点場⇒視対象の関係が明解なシーン景観としての体験だけではなく、遊歩道を散策するようなシークエンスの景観体験や、界わいを回遊する場の景観の体験も考慮する必要があると考える。

本研究では既存の景観の分類を参考に、景観体験を以下のように分類し、地域認識との関係を考察する。

(1) シーン景観の分類

シーン景観は、4-4での考察を受けて、以下の二つの観点から分類する。

① 圍繞景観・眺望景観（通し景/展き景）

圍繞景観は周りを樹木などで囲まれている、見通しの開けていない景観をいう。眺望景観については、西村幸夫＋眺望景観研究会により、通し景（perspective）、絞り景（vista）、展き景（panorama）と分類されている⁹⁾を参考に、本研究では絞り景も通し景の一部と考え、通し景と展き景による分類を行った。

② 内部景観・外部景観

ある空間を、その内側から見ているか（内部視点景観）、

外側から見ているか（外部視点景観）によって分類した。

(2) シフト景観の導入（転換の体験）

本研究では、体験を重視する観点から、「シフト」という概念を導入する。シフト景とは、大きく景が変化する、その局面の景観体験のことである。シーン景観では静止した景観を対象とし、シークエンス景観が主に漸次的な景の変化をとりあげているのに対し、転換の瞬間、「変わった」という認識に着目する概念であるといえる。

シフト景観は眺望⇒圍繞、圍繞⇒眺望、通し景⇒展き景、展き景⇒通し景、外部景観⇒内部景観などが考えられる。

(3) シークエンス景観（漸次変化・持続体験・繰り返し）

シークエンス景観は、身体の移動を伴う景観体験である。統一されたシーンが続く持続体験や、湾曲した街路でシーン景観が漸次的に変化することなどが考えられる。また、寺社を参拝するときのような、秩序だった景の変化の体験もこれにあたる。

(4) 場の景観（周辺環境の体験）

場の景観は、ある一定の領域内におけるシーン景観、シフト景観、シークエンス景観の総合的な体験によって表現される。このとき景の変化の秩序や順番は重要ではなく、同じ体験が繰り返起こることや、対象をさまざまな視点から見る体験によりある領域が理解されてくる。同じ対象を内部景観と外部景観両方の視点で体験することはこれにあたる。シーン景観の繰り返しとしては様々な方向から地域の象徴的な構造物や海や山などの地勢を見る体験が考えられる。また住宅街などで、統一されたデザインキーワードがあると、面的に歩き回ってもほとんど同じシークエンスを経験する。

5-3 現地調査による地域認識

北区と世田谷区における200箇所の現地調査により、認識される地域の構造を表5-1にまとめる。

表5-1 現地調査より読み取られた地域認識の割合（%）

	地勢	district	edge	path	node	landmark
北区	28.0	28.0	31.0	63.0	42.0	41.0
世田谷区	20.0	41.0	17.0	49.0	40.0	49.0

現地調査と文献調査で大きく違いがあるのがpathとnodeの割合である。これは著者のみの体験による分類なので仮説的ではあるものの、選定された場所やものをidentifyするのに周囲の街路環境が大きく影響していることを示唆している。また、地勢が多いのは世田谷区と北区に共通して崖線があることによっている。

表5-2 地域認識の重複率（%）

認識数	1以上	2以上	3以上	4以上	5以上	平均認識数
北区	87	75	43	22	6	2.33
世田谷区	91	66	36	18	5	2.16

北区、世田谷区ともに、文献調査よりも際立って認識数が多い結果になった。大田区のような川と橋によるedgeとnodeの組み合わせはそう多くはなく、districtとpathやnodeの組み合わせが多い。公園や寺社の緑地が、外部景観によっても認識されることで地域構造の認識は大きく高まることになる。

5-4 地域認識としての景観特性

地域認識の要素ごとに、景観体験の特徴について考察する。

(1) 地勢

① 通し景

都心部において、地勢の多くは坂道の通し景の経験によって認識される。

② 通し景と展き景を体験する場の景観

特に急坂では、頂上からの展き景を得る。登り坂の通し景を体験していた人が頂上で振り返ると、景の構図が一変するシフト景観も同時に体験し、より印象的に地勢を認識することになると考えられる。



図 5-1 岡本 3 丁目の坂道（下から）



図 5-2 岡本 3 丁目の坂道（上から）

③ 圍繞景観と眺望景観を体験する場の景観

起伏のある場所は緑地として残されていることが多く、内部では圍繞景観を体験するが、高台の頂上や崖の淵に出ると周囲の町並みを一望する視点場を得る。



図 5-3 五島美術館内庭園



図 5-4 庭園より二子玉川方面

④ 内部景観と外部景観を体験する場の景観

内部景観としては坂や段差と樹木に囲まれた景観を体験し、外部景観では通りからこんもりとした緑地を視認する。



図 5-5 飛鳥山公園



図 5-6 音無橋より飛鳥山

(2) district

① 圍繞景観

公園などの内部の圍繞景観には、芝生や池などある領域を眺めるものと、内部で散策し、折れ曲がりなどのシーケンスを得るものに分かれる。



図 5-7 世田谷公園噴水広場



図 5-8 世田谷公園散策路

② 通しから圍繞へのシフト景観とシーケンス景観

特に寺社では、参道の門や鳥居をアイストップにした通し景から境内に出て囲われた空間を見るとき秩序立った体験を得ることが多い。



図 5-9 無量寺



図 5-10 無量寺境内

③ 内部景観から外部要素を視認する

district を認識する景観体験としても、地勢の③のように内部景観と外部景観を体験する場の景観を体験できることは多い。また、地勢の②のような眺望が得られることは少ないが、内部景観から外側の都市要素を視認できることがある。



図 5-11 芦花公園から清掃工場

④ 通し景の繰り返しによる場の景観



図 5-12 西ヶ原住宅街桜並木

住宅街、商店街などでは似た街路景観が面的に広がっており、共通点のある通し景が繰り返し体験される。

(3) edge

① 通し景

edge はほとんどが河川と鉄道により認識されている。その他の要素としては崖線があるが、これは地勢とともに認識されることが多い。橋上や河川沿道からの通し景は最も基本的な edge の認識である。

また、視線と直角方向に河川や鉄道があるときは、edge が横切る構図の通し景を得る。



図 5-13 新河岸川遊歩道



図 5-14 荒川土手を見る

② シーケンス景観

河川沿いは緑地や並木があることや、直線ではない部分があることで、散策すると変化に富んだシーケンス景観を得ることができる。



図 5-15 石神井川遊歩道

③ 通し景から展き景へのシフト景観

街路から河川空間に出ると、左右に視界をさえぎるものなくなり、眺望が開ける。

④ 展き景

大河川では、河川から対岸を見る展き景を得る。



図 5-16 多摩川から川崎

(4) path

① 他の要素の認識に付随

path は目的地までの行程で認識されることが多く、path のみが認識されている事例は 5%程度であった。つまり district の外部景観としてであったり、edge に沿った歩道であったりと、他の要素の認識に付随する形で認識される。

② 通し景のシークエンス



path 単独での認識は、並木や商店街をたどる通し景のシークエンスとして得られることがほとんどである。

図 5-17 成城の桜並木

(5) node

① 他の要素の認識に付随

node は、district や landmark が接する交差点として認識されることが多い。そこで path と同様に、他の要素の認識に付随する形で認識される。

② 通し景を横切る視対象 (外部景観として)



図 5-18 環七と世田谷線

選定された path が駅と繋がっている例や、街路と川や線路が交わる例では、図 5-14 と同様に通し景を横切る node が視対象になる構図のシーンを体験する。

③ 通し景から展き景へのシフト (内部景観として)

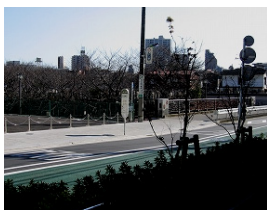


図 5-19 紅葉橋

path から node にでると、前後左右に視界が開けるため、ある種の開放感のようなものを得、印象に残る。

(6) landmark

① 通し景における視対象、シークエンス

通し景において landmark が視対象となる構図は、視点場と視対象の位置関係によって、landmark の直近に立って通りを見る (図 5-20)、通りに沿った landmark を見る (図 5-21)、landmark が通りにのぞいている (図 5-22)、landmark がアイストップとなる (図 5-23) などに分けられる。移動する間にシークエンス景観としてさまざまな構図を体験する。



図 5-20 田端切り通しと橋



図 5-21 十条台パノラマプール



図 5-22 日大理工学部と桜



図 5-23 廻沢のガスタンク

② 展き景における視対象



川沿いなどでは、landmark が展き景における視対象となるシーン景観を体験する。

図 5-24 荒川赤水門

③ ①、②の組み合わせによる場の景観

さまざまな視点場から認識する、場の景観の体験によって landmark が認識されている。

④ 他の要素の認識に付随

図 5-11 のように、他の要素を認識する手がかりとして landmark が認識されることは多い。

以上の考察から抽出された、それぞれの地域構造の認識に対応する景観体験をまとめると表 5-3 のようになる。

表 5-3 地域認識としての景観体験特性

	困 繞 景 観	通 し 景	展 き 景	内 部 景 観	外 部 景 観	シ ー ク エ ン ス	シ フ ト	場 の 景 観
地勢	●	●	●	●	●	●	●	●
district	●			●	●	●	●	●
edge		●	●			●	●	
path		●				●		
node		●	●	●	●		●	●
landmark		●	●			●		●

内部景観—外部景観は、内側、外側という概念がある場所での観点であり、場の景観の体験と関連するのは、両方の視点から眺めることで地域認識が深まると考察したことによる。

地勢はすべての種類、観点の景観体験で認識されている。逆にいえば、起伏のあるところではさまざまな景観体験が得られやすいと考えることができる。シーンの構図では、通し景によって認識できる地域構造は困繞景観より多いことがわかる。

5-5 地域認識の複層性と景観体験

複数の地域構造が同時に認識される場所では、それぞれ独特組み合わせでの景観体験が得られる。

以下に北区景観百選 37 の赤羽八幡神社を例示する。

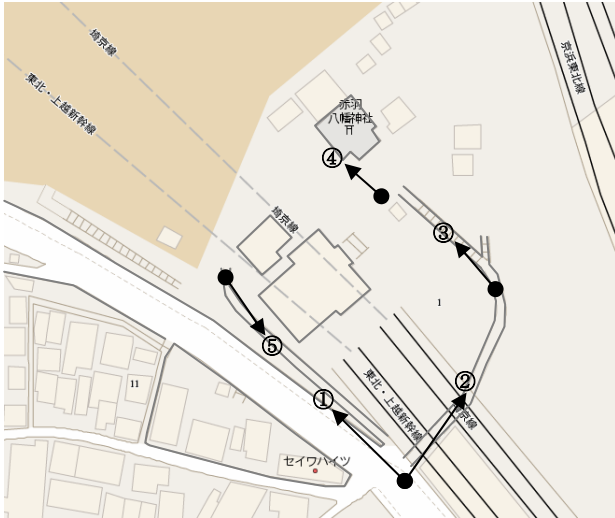


図 5-25 赤羽八幡神社周辺の視点場と視線の方向

赤羽八幡神社は、赤羽の崖線上にあり、京浜東北線と新幹線が合流する地点の高台にある。坂の下から師団坂脇に大きな鳥居が見える（図 5-26、視線①）。線路をくぐるように参道があり（図 5-27、視線②）、階段を登り（図 5-28、視線③）境内に入る（図 5-29、視線④）。裏手の鳥居をくぐると、坂上から線路と赤羽市街の眺望を得る（図 5-30、視線⑤）。

これら一連の場の景観の体験から認識される地域構造を以下に示す。

表 5-4 地域認識の複層性

地勢	坂道の通し景・トンネル階段を登るシークエンス
district	神社境内へのシフト景観と圍繞景観 展き景に見る赤羽市街
edge	通し景・展き景における線路
path	通し景の坂と崖線
landmark	通し景に見る鳥居

このように、複数の地域構造が同時に認識されるようなところでも、5-4 で抽出された景観体験の重ね合わせとして説明することができると思われる。



図 5-26 写真①



図 5-27 写真②



図 5-28 写真③



図 5-29 写真④



図 5-30 写真⑤

6. まとめ

6-1 研究の成果

- (1) 東京都区内で行われた景観百選事業によって選定された 1114 の景を分類し、選ばれやすい場所や風景を特定した。
- (2) 写真集、絵画集が発行された 5 区について、地域認識の複層性と景の構図の関係を分析したところ、圍繞景観よりも、河川沿いや高台のように周囲が見渡せる眺望景観のほうが、より複層的な地域認識がされやすいことが推察された。
- (3) 北区と世田谷区の現地調査により、どのような景観体験から地域認識をすることができるのかをまとめ、複数の地域構造が同時に認識できるところでも、個別の景観体験の組み合わせとしての場の景観の体験で説明できることを示した。

6-2 今後の景観計画における論点の考察

現在の景観計画においては、重要な眺望の保全や街路の美観向上が主要な課題となっており、百景の選定と景観計画の接点はほとんどないといえる。

地域らしさを高める活動は、場所の創出とともに今ある資源を発見することがきわめて重要である。百景によって描かれる地域の全体像は、地域住民が抱いている地域のイメージの集合体と捉えることができる。百景の選定は点的な資源の集合と捉えられがちであるが、実際にそれぞれを詳細にみると、周囲の地勢や都市構造と深く関わりあいを持っていることがわかる。

整備事業により創出することができる地域らしい場所は限られている。景観百選のような事業で抽出された地域のイメージを、生かし高めていく活動を誘発することが今後の景観計画として重要な論点となると考える。

参考文献

- 1) 西村幸夫+町並み研究会：日本の風景計画 都市の景観コントロール 到達点と将来展望，学芸出版社，pp74-84，2003
- 2) 佐々木葉：現代の景観の目的と処方，景観・デザイン研究講演集 No. 1，pp276-281，2005.12
- 3) 樋口忠彦：景観の構造，技報堂，1975
- 4) ケヴィン・リンチ：都市のイメージ，岩波書店，1968
- 5) 都市デザイン研究体：日本の都市空間，彰国社，1978
- 6) 宮下真紀子：眺望景観と歴史的都市の構造に関する研究，卒業論文，2005
- 7) 景観デザイン研究会：景観用語辞典，彰国社，pp28-29，1998
- 8) 斉藤潮，土肥真人：環境と都市のデザイン 表層を超える試み・参加と景観の交点から，学芸出版社，pp36-37，2004
- 9) 西村幸夫+眺望景観研究会：東京の眺望景観を俯瞰する，季刊まちづくり 2号，学芸出版社，p103，2004
- 10) 野原卓：普通のまちに「良好な景観」をつくる 「眺望」による景観計画，季刊まちづくり 7号，学芸出版社，pp52-56，2005
- 11) ジェイ・アブルトン：風景の経験 景観の美について，法政大学出版局，p118，2005
- 12) 各区区報、広報パンフレットなど